

大事なことを皆で考え決めるために

< 4 >

「第2工区=里山」の過去・現在・未来



『さとやま 生物多様性と生態系模様』<表紙写真：左>
(鷲谷いづみ著/岩波書店/ジュニア新書〈知の航海〉シリーズ)

《内容紹介》

「萩(はぎ)の花 尾花(おぼな/ススキのこと) 葛花(くずばな) 瞿麦(なでしこ)の花 女郎花(おみなえし) また 藤袴(ふじばかま) 朝貌(あさがお/いまのキキョウのこと)の花」——これは、万葉歌人の山上憶良が秋の七草を詠んだ歌です。みなさんは、このうち、いくつの花を思い描くことができますか。こうした野草は、千年以上前の万葉の歌人だけでなく、何十年か前の人々にとっても、ごく身近な存在でした。しかし、いまではその多くがめったに見られない希少な植物となってしまいました。これは昆虫やカエルでも同じことです。なぜそんなことが起こっているのでしょうか。そのひみつは「さとやま」にあります。かつて人々は、自然の恩恵をうまく利用し、適度に手を入れながら、暮らしを営んできました。そうして形成される半自然が「さとやま」です。さとやまを空から見ると、屋敷林や雑木林、田んぼやため池、茅場などが、まるでパッチワークのような模様を描いています。その模様は、生きものたちにとっては複雑で多様な環境となり、多くの種にすみかを提供してきました。いま、そのさとやまの衰退とともに、多くの生きものたちが消えようとしているのです。この本では、さとやまの歴史を人類の誕生からたどりつつ、生態学はもちろんのこと、文化的な面からも広くその価値を考えます。そして、各地ではじまった再生の取り組みを紹介し、さとやまの未来を考えます。いまこの時代に、さとやまとそこに暮らす生きものたちをどうやって取り戻すことができるのか。一緒に考えてみませんか。(岩波書店 編集部 朝倉玲子)

大事なことは皆で決めよう会

(第2工区=里山)の景観

